

こうして若犬は、ムク犬のゴンと行動を共にすることになった。家には帰リたかつたが、帰るすべを知らなかつたし、まずは生きていなくてはならなかつた。

若犬はこの老犬についていくのに必死だつた。ゴンのやる事をひとつ残らず、見よう見まねで覚えた。

また老犬のゴンにとっては、この若犬との旅は時として彼の足手まといになりかねなかつた。野良犬にとっては、とっさの判断が命取りにもなりうる。二匹の旅は、そんな危うさをも持っていた。

しかしゴンは黙つて若犬を連れ歩いた。

大きな椎の木の根方で、二匹は夜を明かした。

桜の花が風に散り、辺りの木々は新緑を纏いはじめた。

ある日、若犬が目覚ますと、ゴンの姿が見えなくなっていた。

「……おじさん……ゴン……」

辺りをきよろきよろして、呼んで見てもゴンの姿はない。

……どうしちやつたんだらう……

とうとう自分は、頼りにしていたゴンからも見放されてしまったのだろうか。若犬は心細くなつて、鼻を鳴らした。

……自分はいったどうなるんだらう……

若犬は不安になつて、ただジツとしていることしかできなかつた。どのくらい時間が経つただらうか。

彼は気配を感じて、飛び跳ねるように立ち上がった。耳をそばだて、尻尾をぴんと立てるとユサユサと揺らしてその方向をまっすぐに見た。

やがて、遠くからゴンの姿が現れた。

ゴンは、獲物を銜えて戻ってきたのだった。それは一羽の小振りなメンドリだった。

「おじさん……何処行つてたの？ 僕、心配しちゃった……」

「食べるー」

若犬の目の前に、仕留めた獲物を置くと、ぼそつと言い放った。

何日も餌にありついていなかった若犬は、捕ってきた獲物を前にして

「おじさんは？……」

ゴンは黙ったまま答えなかった。

若犬は、獲物にかぶりついた。

こうして、また幾日かが過ぎていった。

激しい雨だった。

雨の中をおしてでも行かなければならない処など、今の二匹にはあるうはずもなかった。

農家の納屋で二匹は雨宿りした。干し草の散らばる石のたたきに、二匹は坐りこんでいた。

若犬は前肢を伸ばしてあごをのせ、ゴンは横坐りをして肢を投げだしている。

ゴンは黙って空を見上げ、若犬は地面を見つめ、沈黙の時間が流れた。納屋の壊れかかった庇から、雨垂れがとめどなく落ちてくる。

「おじさん……」

若犬が、問いかけた。

「おじさんは……ゴンは、いつから野良犬になったの？」

「さあな……」

ゴンは、フツと小さくため息をついた。

「ずっと昔のことだ……」

「どうして野良犬になったの？」

「 さあな… 」

雨音だけが響いた。

「 小僧… 」

ややあつて今度は、ゴンが声をかけた。

「 はい 」

「 お前は、なんでうつちやられたんだ？ 」

「 え？… ほんと… わからない… 」

若犬は自分に向けられた同じ質問に言葉がなかった。

「 …… だろ？… 」

ゴンは、フフと小さく笑うと続けた。

「 そんなもんさ… 。小僧、お前がいつまでも小さい子犬のまんまだったら、もしかしたらずっと家にいられたかもしれねえな… 」

「 …… 」

若犬は、水溜まりにできては消える水の輪を見つめたまま黙っていた。

「 小僧、お前はデカくなる… ；まだまだデカくなる。… ；俺と同じさ… 」

「 …… 」

「 これで俺に血筋の良さでもありゃあ別だったろうが… 」

「 血筋… 」

「 ああ、血統だあね。俺あ… ；俺のおっかあがブチと駆け落ちしたんだ… 」

血統の良さ、と聞いてあの牧場の犬を思い浮かべた。

自分の親はどうなんだろうか。自分はどこから来たんだろうか。いつからあの家に居たんだろうか… ；

若犬は、とぎれとぎれの記憶をたどって自分の飼い主のことを思い出していた。

…冬の頃、暖かい部屋の中に飼い主の家族が、ソファの辺りで楽しそうに話していた。

フカフカしたモールやリボン、キラキラ光る飾り物で飾られた大きな木が部屋に置かれ、周りには色とりどりのリボンが結ばれた箱が飾られていた。自分の首にも飾りやリボンが結ばれ、代わる代わる人の腕に抱かれては、微笑んでくれた。

「わあ、ムクムクしてる、かわいい子犬ねえ」

「ぬいぐるみみたい…」

「この犬、でかくなるぞ、この前脚見てみる、すごいぶつといぞ」

男の子と女の子が、順番をめぐって自分を取り合いしているのを、大人たちが笑いながら眺めていた。

誰もが、自分の頭を撫でては、頬ずりしてくれた…。

つづく